

人間関係の形成と主体的に表現する力の育成を目指した能動的な学習

～「シェアリング」場面におけるタブレット端末の効果的活用～

思考力 判断力 表現力 人間関係の形成 能動的な学び

伊東市立旭小学校

〒414-0055
静岡県伊東市岡1270-1

http://ito-school.jp/asahi/htdocs/index.php?page_id=0

1. 研究の背景

本校は、静岡県が提唱する人間関係づくりプログラムの実践研究に継続的に取り組み、不登校児童数や問題行動件数の減少という成果を得た。一方で授業において、主体的に活動すること、自分の思いを伝える表現力に課題が多いという実態があるため、これらの課題を解決する手だてとして ICT の活用を考えた。また、平成 27 年度より、伊東市が文部科学省から委託された「ICT を活用した教育推進自治体応援事業」の指定実証校として 2 年間の研究に取り組むこととなった。実証校として指定を受けるにあたり、静岡大学との共同研究でタブレット 20 台が導入された。また、平成 27 年度は、本事業の推進校である伊東市立東小学校の実践を参考に、6 年の算数「拡大図と縮図」においてジグソー学習法を実施した。この授業では、タブレットを活用し意欲的に表現する姿が見られた。このように、協調的に問題を解決する過程に ICT を活用することで、本校の目指す主体的に表現する力を具現化できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

以上を踏まえ、平成 28 年度は、協調的問題解決の授業における ICT の活用については東小と共同で研究を進めていくと同時に、本校の研究である、人間関係づくりの手だて「シェアリング」（授業における振り返り）の場面におけるタブレットの活用を進め、授業において主体的に表現する力の育成と望ましい人間関係の形成を図っていくこととした。

3. 研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
4/15	第 1 回人間関係づくりプログラム効果測定実施	児童アンケート
6/24	第 2 回人間関係づくりプログラム効果測定実施	児童アンケート
7/13	6 年生算数「並べ方と組み合わせ方」授業研究	ホワイトボード写真 発話記録
9/13	6 年生算数 2 ヶ月後回顧アンケート実施	児童アンケート
11/16	6 年生算数「速さ」授業研究	ホワイトボード写真 発話記録
	5 年生体育「サッカー」授業研究	動画記録 参観者メモ
11/24	5 年生社会「工業生産」授業研究	ワークシート 参観者メモ

11/25	第3回人間関係づくりプログラム効果測定実施	児童アンケート
12/5	4年生国語「ごんぎつね」公開授業研究会実施	ワークシート 発話記録
2/5	4年生国語2ヶ月後回顧アンケート実施	児童アンケート

4. 代表的な実践

・4年生国語「ごんぎつね」アプリケーションの共同作業ツールを使用した思考の共有化

過去に伊東市立東小学校においてジグソー学習法で実践した単元である。エキスパート班では、ごんと兵十のグループに分かれてそれぞれ付箋に叙述とそこから読み取れる心情を記入し、ジグソー班では、両者の付箋を出し合いながら、ごんと兵十の心は近づいたかどうか、心の距離をグラフ化するという先行実践を参照することとした(図1)。ICTの導入については、単元のまとめとして書いた個々の振り返りを共有する「シェアリング」の場面において活用した。振り返りを書いたワークシートをタブレットで撮影し、アプリケーション「Keynote」の共同作業ツールを使用し、各スライドに個々のデータを掲載していくことで、誰もが閲覧できる状況を作った(図2)。従来は、発表という形で、数人しか振り返りを紹介できず、またその他大勢の聞いている子たちは受け身の状態であったのが、自分から他の友達の記述を読むという点で、能動的にたくさんの考えに触れるきっかけとなった(図3)。

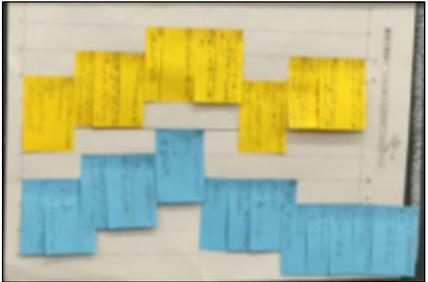


図1 ジグソー班でまとめたグラフ

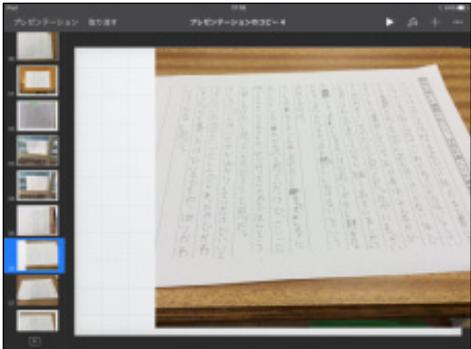


図2 「Keynote」による共有画面



図3 共有された他の児童の感想を読む様子

・2ヶ月後の学習定着度と発話記録による分析

「Keynote」の共同作業ツールを活用し、個々の感想を閲覧したことによって、どのような成果が得られたのだろうか。ある児童Aの学習の履歴を確認していくと、自分の課題意識に沿って選択している可能性が見えてきた。そこで、児童Aの記録や授業での発話を振り返りながら思考を追ってみる。

授業から2ヵ月後に行った回顧アンケートを見ると、児童Aは、ごん的心情の変化について定着した形跡が見られる。「ごんは、はじめいたずらが大好きなきつねだった。でもだんだんいい子になってきた。」「ごんは、だんだんいいきつねになってきた。」「Bさんがごんっていいきつねになったよね。と言っていた。」と、ごん的心情の変化に注目している(図4)。

では児童Aは、単元終了時の「Keynote」による閲覧で、誰のどのような考えを選択しているのだろうか。児童Aは、3名の児童をよい感想として取り上げている(図5)。それぞれを取り上げた理由として、「ご

表1 ごんが兵十に撃たれた場面について話し合う発話記録

番号	児童	発話
1	C	まず今日はごんから
2	C	39から読むよ
3	A	うん
4	C	ぐったりと目をつぶったままの気持ち、くりなどあげたのに気付いてくれたからよかったと思った
5	C	これは、ありがとうという気持ちを伝えているので2でいいですか
6	D	いいよ
7	D	そうだよほくだったんだよ兵十さまなら
8	C	3でいいですか。さまならっていつてわかれるので、3でよろしいですか。
9	A	えっ2じゃない?
10	C	うなずきました。神様じゃなくてほくだったんだよ
11	A	ほくだったんだよって、わかってるよ
12	C	ごんだから
13	A	だって書いてあるじゃん。ほら
14	C	これごんだよ
15	D	撃たれてるじゃん、ごんが。だから撃たれているときにうなずきましただからまだちょっと生きていて
16	A	あーあー
17	D	でも、この声はたぶん聞こえなかったから
18	D	だからほくだったんだよ
19	C	これなに? どうなったこれ?
20	C	悲しい気持ちだから3で
21	A	なんでうったのって?
22	A	へんじゃない? へんだよ。
23	E	何で?
24	A	なんでうったの?
25	E	うちちはわかるんだよ。なんで撃ったか。あやししいから。
26	A	ごんはわかんないじゃん。
27	E	ごんの気持ちになってごらん。死んだんだよ。
28	A	ごんとき、39は死んでないから
29	E	なんで、ごんはぐったりと目をつぶったまま...
30	A	だからぐったりでも、まだ生きてたかもしれないでしょ

・人間関係づくりプログラム効果測定結果について

本学級の児童40名の人間関係づくりプログラムの効果測定結果(第2回6月実施)は、D群が9名、C群が0名、B群が4名、A群が27名である(図10)。D群の9名の子については、言葉の捉え方の行き違いから日常場面での問題を解決することが苦手な子、言葉による表現が苦手で、書く、読むなどの活動へ取り組むことに抵抗を感じる子がいる。そこで、小グループでの協調的な問題解決の場を設け、人間関係においてストレスにならない意図的な座席の配置をしたり、付箋を使い、言語的な表現を簡略化しながら思考を視覚的・作業的に表現できるようにしたりし、言語的スキルを高めながら前向きな姿勢で問題解決できるようにした。一方、学級全体としては、信頼他者の値が最も高く平均を大きく超えている(図8)。これは、多くの子が、発言を一部の子どもたちに頼りがち、もしくは、発言をする必要性を感じていないことが予想される。なお、この数値は、平均に近いほどよい。つまり、多人数学級がゆえ、一斉の形態での発言の抵抗感や必要性の無さを感じている子が多いと考えられる。そのような視点からも、小グループで必然的に対話する機会を多くもち、考えを気兼ねなく話すことができるようにした。さらに、「ICTを活用したシェアリング」も、能動的に友達の考えに働きかける活動になると考えた。

第3回の効果測定は、本単元の授業を実施している中での測定であった。ジグソー学習法による小グループでの対話の機会やICTを活用したシェアリングの機会も多く設定されていた。結果は、D群が10名、C群が2名、B群が3名、A群が25名である(図11)。D群、C群が増えた結果となったが、学級全体としては、図9のように、チャートのバランスが過去2回と比較すると、均一に保たれている(図9)。その理由として挙げられるのは、D群の児童の中でも、数値が上がった児童がいるためである。D群の児童に注目すると、8番の児童は、信頼感が上がっているため、学級への安心感が高まったと捉えることができる。また、23番の児童は、スキルの数値が上がっているため、人間関係を育むスキルが向上したと捉えられる。さらに33番の児童は、中心に近づいてきており、学級への信頼感、人間関係を育むスキル共に向上していると捉えることができる(図11)。

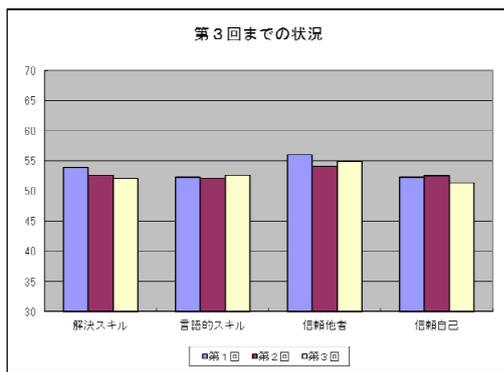


図8 効果測定3回の状況

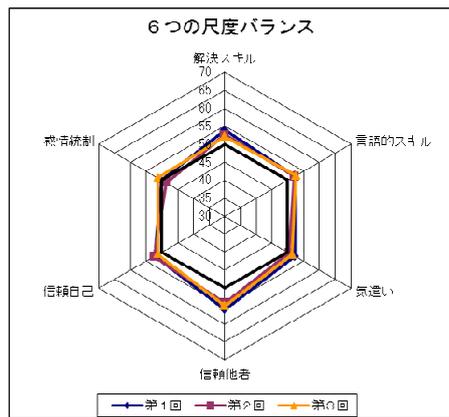


図9 効果測定調査項目チャート

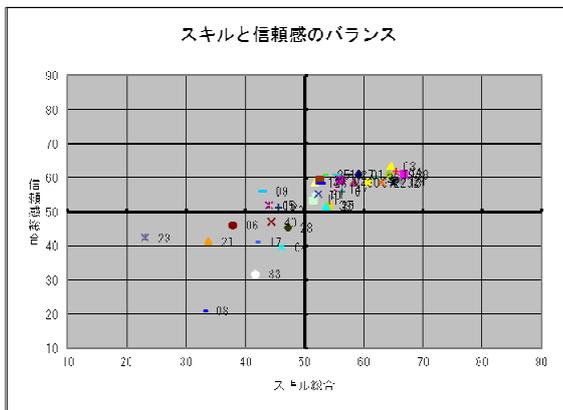


図10 第2回効果測定個々の児童の結果

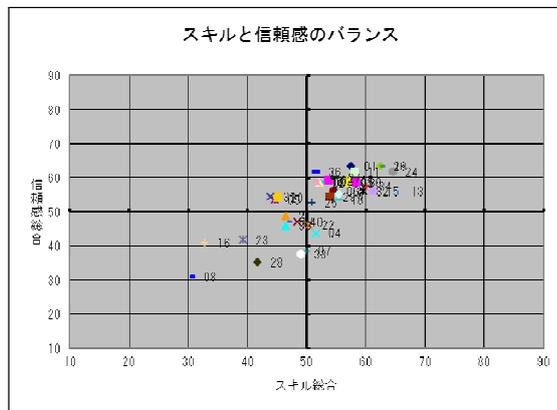


図11 第3回効果測定個々の児童の結果

5. 研究の成果

シェアリングにおける ICT の活用により、従来は、発表という形で、数人しか振り返りを紹介できず、またその他大勢の聞いている子たちは受け身の状態であったのが、自分から他の友達の記述を読むという点で、能動的にたくさんの考えに触れるきっかけとなった。人間関係づくりプログラムの効果測定の結果でも示しているように、他の子たちに頼りがちな子たちが、自分の考えと比べながら学習を振り返ることで、より確かな学力の定着につながっていく可能性がある。

6. 今後の課題・展望

児童Aのように、一貫した課題意識をもち、効果的な対話をしながら、自分の関心に基づいて「Keynote」で思考の共有ができる児童もいるが、40人の学級において、全ての児童が該当するかというとそうではない部分もある。個々の課題意識が授業に反映され、その授業の中で効果的な対話を実現し、持続した課題意識に基づいた振り返りの記述やその共有など、より多くの児童の学びを補償していくことが目指される。

「Keynote」による思考の共有において、今回は閲覧することが主な活用方法であったが、それぞれのスライドに書き込むことも可能なため、文字入力の手がスムーズにできるようになると、感想を書き込んだり、それをまた閲覧したりと、よりよい人間関係の形成につながると考える。

さらに、学習の定着と人間関係づくりプログラム効果測定結果の因果関係についても明らかにしたい。人間関係が学力の定着に与える影響が明確になることで、ジグソー学習法において意図的なグループ編成が可

能となるからである。意図的なグループ編制が、より深い対話を生むための手だての一つなることを期待したい。

7. おわりに

今年度、大型モニターの導入、各教室の無線 LAN の整備等、環境面で大きく充実を図ることができ、高学年を中心に ICT 活用の機会を多く持つことができた。さらに、「ICT を活用した教育推進自治体応援事業」の先進校である伊東市立東小学校の実践を参考にしながらも、旭小独自の視点での ICT 活用が実現しつつある。次年度は、校内研修において「思考が働くかかわり合い」をテーマに研究を推進していく。ICT 活用も効果的なかかわり合いを生むための手だての一つとして位置づけ、充実を図っていくことを期待したい。

8. 参考文献

- ・静岡県教育委員会『人間関係づくりプログラム活用の手引き』
<https://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-060/documents/tebiki.pdf>
(2016年11月28日参照)
- ・三宅 なほみ, P. グリフィン, B. マクゴー, E. ケア, 益川弘如, 望月俊男 (2014) 『21世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち』北大路書房